

報 告

昭和56年度定例会発表要旨

昭和56年

■ 5月27日

研究発表

近世における庶民信仰の動向

北 村 行 遠

(史学科講師)

江戸時代ほとんどの人びとは、幕府の宗教政策によって氏神一氏子、檀那寺一檀家という関係で、神社と寺院に属し、各家には、地域の守護神である氏神を祀る神棚と、一家の代々の祖霊を祀る仏壇とがあり、人びとはそこで商売繁昌と家内安全を祈願し、日常的な信仰生活を営んでいたといえる。

ところが、江戸時代中期以降、消費を中心とする都市生活が広まるようになると、こうした氏神や祖霊だけを崇拜するのではことたりぬ宗教状況が現われてくるようになってきた。それは、都市生活を営む民衆の信仰に基づくもので、かれらの日常的諸側面より生じた雑多な信仰、いわゆる種々の現世利益に対する欲求である。

こうした民衆の現世利益の欲求に即応して、おもに都市を中心に神仏の霊験の分業という現象がみられるようになり、多彩な霊験をもつ神仏が祀り出されるようになってきた。

そして、そこでは神仏への願かけ番付や、神社仏閣巡拝の案内書などが大量に作られたりして、氏神祭りや小祠の祭り、勧進や開帳、縁日などに群参する民衆の姿をみる事ができた。

本報告では、こうした都市民衆の現世利益を中心とした信仰生活の中で、民衆の法華信仰がどのように展開していたのかを、江戸における日蓮宗寺院の開帳、および開帳を契機として作られることの多かった寺院の略縁起が語る祖師（日蓮）像をみることによって考えてみた。そして、次のような点を指摘することができた。

開帳については、祖師の霊跡に結びつく有名寺院を中心に、祖師像の開帳が展開されており、それは他宗に比べて盛んに、永続しておこなわれていた。また、略縁起が語る祖師像については、開運厄除・日切満願など種々に呼称される祖師像があり、そのどれもが霊験の役割を

分担し、きわめて機能的に説かれている。

こうしたことから、法華信仰の人びとの信仰の基底には、祖師（日蓮）に対する信仰があり、前にみた都市民衆の現世利益の欲求に即応した神仏の霊験の分業化という現象が、ここでは日蓮という一人の傑出した宗教者に対する信仰を通して凝縮され賄われていたといえる。

学校施設研究の意義と課題

喜 多 明 人

(教職課程講師)

我が国においては、学校施設の研究は、従来から一般建築学のレベルにおいてのみ行われてきたとって過言ではない。しかしながら、以下の点からこれを教育学の専門的一分野として位置づけ、研究していく意義を有すると考えられる。

第一には、各学校における実際の教育諸活動あるいは教育運営活動の可能性の幅が、学校施設の整備の如何によって現実的に規定されていることである。

第二には、以上の点とかわかって、そもそも、学校施設の機能、形態、位置などの諸条件が、児童生徒の学習意欲、生活意欲、安全性、心身の健康等や、教師の教授方法、生活指導方法等と、本来的に不可分な関係にある、ということである。

以上のとおり、学校施設の教育学的研究の必要性をふまえて、今後、施設整備経費などの経済性との調整のもとに児童生徒の“学習”の場、“生活の場”としてふさわしい施設環境づくりにとりこんでいくことが課題となる。

■ 6月24日

研究発表

教員研修のしくみと問題点

浪 本 勝 年

(教職課程助教授)

今日、学校教育に対する国民の期待は、その現実の荒廃状況（非行・暴力・学力低下等）に比例して大きくな

っている。この教育荒廃を克服し、国民の期待にじゅうぶんこたえるためには、まず、学校教師の教育的力量の向上が望まれる。そのために、とくに教師に期待されるのが研修であり、とりわけ自主研修の重要性が強調されている。

教員の研修法制のしくみをみると、教育公務員特例法19・20条で、教員の研修権が手厚く保障されている。このことは、一般行政公務員の場合の研修規定と比較対照してみれば、一見明白である（たとえば、地方公務員法39条）。

すなわち、一般行政公務員の場合、研修目的が、「勤務能率の発揮及び増進」におかれ、しかも、その種の研修を「受ける」機会が、「与えられ」なければならない、と一方的かつ受動的な立場に立たされているのに対し、教員の場合は、研修目的が教員に固有な「職責を遂行するため」であり、しかも「絶えず」研究と修養に「努めなければならない」と、教員の職務の性質上、不遑の自主研修の努力義務が課せられているのである。

教師の研修の問題点としては、研修費等の財政的保障の問題のほか、自主研修会（とくに組合主催の教育研究会）への参加の態様をめぐって、訴訟事件となっているものもある。

講演

アメリカの批評文学

—Reader-Response Criticismの側面から—

鈴木重吉

(英文学科教授)

この20年来、欧米の一部に読者の反応（response）を重視する文学批評が次第に強く唱えられている。アメリカでは1950年代から、新歴史主義、American Studies、精神分析批評などが一様にその攻撃の対象を、それまで約30年にわたり全盛を極めた「新批評」に絞る観があった。その理由は「新批評」が文学作品を完結した世界と限定し、背景となる歴史と社会、作品を生んだ作家の心理や伝記などテキスト以外の一切を排除し、まして読者の反応には一顧も与えず特殊な用語を作ってガードを固めたため、大きな業績を残した半面、字句やイメージの解釈に当り瑣末主義に陥ったことにある。

「新批評」の勃興そのものが前代の印象主義、社会的批評への反動であり、他方19世紀末以来の科学主義に対する防禦であったため、その地盤沈下も又止むを得ない帰結であった。

「新批評」に次いで起りつつある「読者反」「新批評」

に次いで起っている「読者反応批評」はテキストの解明過程で個人の反応を正当化し、それほど専門家でない読者は批評の権威を「新批評」と共有しながら、同時に哲学・心理学・言語学と手を結ぼうとする。それ故「読者反応批評」の「新批評」への攻撃は、Affective Fallacy（感情に関する誤謬）に向けられ、テキストを独立の対象物とは見なさず、作品が意味を構成する際の読者の役割を重んずる。精神分析批評が批評のこの新しい動きに参加するのは正にこの面においてであり、その典型をN. N. HollandのD(efence) E(xpectation) F(antasy) T(ransformation)の理論に見ることができる。

■10月28日

研究発表

Joyce 移入考—大正から昭和初期を中心に—

鏡 味 國 彦

(英文学科助教授)

James Joyceが日本に紹介されたのは意外に早い。最初のJoyce文献は大正7年3月号の『学鑑』に掲載されたヨネ・ノグチの「画家の肖像」である。これはJoyceの*A Portrait of the Artist as a Young Man*(1916,以下*Portrait*と略す)の内容と文体の特徴を解説したものである。次いでJoyceに関心を持ったのは芥川龍之介である。彼は1918年に*Portrait*を手に入れ、翌年8月の日記にその読後感を記し、11年には部分訳を試みている。芥川の晩年の作品、例えば「大導師信輔の半生」(大正14)、「追憶」(昭2)を読むと、*Portrait*の感化が考えられる。大正14年には堀口大学が『新潮』に「小説の新形式としての〈内心独白〉」を書いて、Joyceの代表作*Ulysses*(1922)とその重要な技法の一つである「意識の流れ」の手法を初めて日本に紹介し、更に大正15年には佐藤春夫が抒情詩*Chamber Music*(1907)の五番目の詩を「金髪の一とよ」というタイトルの下に翻訳している。

昭和に入ると土居光知の「ジョイスの〈ユリシーズ〉」(『改造』,昭4・2)を契機としてJoyce熱はにわかに高まり、季刊誌を中心に彼の作品の翻訳、研究論文が矢継ぎ早に発表され、いわゆるJoyceブームが到来し、文壇に「意識の流れ派」とか「新心理主義文学」という呼称が広まり、Joyceの手法をまねた作品が次々と書かれた。しかし、このブームも昭和7年を境に急速に去っていった。

本研究の目的は、Joyce紹介の跡を辿りつつ、Joyceブームが去った原因をさぐり、Joyceが果して日本におい